

「大分方言まるだし弁論大会」

松田美香

一 ビーとボンく懐かしの方言の再生く

「子どもが ビーとボンと 二人あんのんじゃ。どっちも 結婚しちよつち 孫が あつち 内孫が ひとり あつち 外孫が ふたり あんのじゃ。そいが みーんな ボンのじょー。ほーじゃけんど よー見りや えらしーのじゃ。」(第二十二回 国東市・女性・七〇歳 「明治の親は強かった」最優秀賞)

昨年最も会場を沸かせた弁論のくだりである。適宜漢字を当てたのでおおよその文意は伝わると思うが、「ビー」は女の子の意味。『日本方言大辞典』（小学館編著一九八九年）を見ると、日本各地に「オビースン」「ビタイ」「ピントレ」

を始め多数の言い方があり、文献としては『続東海道中膝栗毛』七・上（十辺舎一九著・一八一六年）に「あのびたい（注・をんな）ならおら買いますべい」がある。「ボン」は大坂など近畿地方と岡山県、愛媛県伊予郡、大分県西国東郡（今の国東市）で「男の子、少年、男児」の意味とある。『守貞漫稿』（喜田川守貞著・一八三七〜五三年）に「男子童形を坊様 京阪にてぼんと訓ず 江戸にてぼうと訓ず」。「ボンのじょー」は「男の子ばかり」という意味。「えらしー」は「愛らしい」から「かわいい」の意味。ビーやボンは今や高齢者にとっても懐かしい方言だ。

毎年十月第三日曜日の午後開催されている「大分方言まるだし弁論大会」は、昨年第二十二回を迎えた。二十四年前

にこの大会を始めたきつかけは、大分県を有名にした「一村一品運動」の頃、物に拘らずに自分たちも何かやってみよう
と豊後高田市の若き後継者たちが企画したイベントの一つだ
ったそうだ。最初の一回だけは仲間に弁士を頼んだが、それ
以降は十名前後の弁士希望者が絶えない。場所は地元大型店
の屋上からすぐに市の中央公民館へ移されたが、毎年満席以
上の大盛況となる。第十回大会は大分市文化会館で最優秀者
大会を、その後二年間の充電期を経て、第十四回大会は国民
文化祭として工業団地内特設会場で全国方言大会を開催し
た。現在は大分県民芸術文化祭参加行事であり、市や地元企
業などから後援を受けて開催されている。

二 運営に関わる人々

大会の形式は、申し込み順に弁士が五分以内で弁論し、最
後に最優秀賞、優秀賞、市長特別賞受賞者が発表される。こ
の大枠は一貫して変わらない。審査員六名が採点する採点用
紙には、表現力五点、方言力七点、内容五点、制限時間三点
の二〇点満点の表があり、それぞれの点数が集計され審査を
加えて各賞を決定する。採点方法と採点表は、項目を増やし
たり点数配分を変えたりして年々改良されている。副賞は
米、葱、落花生、海苔、ビールやジュースなど、全て豊後高
田市の産品である。大会中それらが舞台奥に所狭しと並べら

れ、表彰式では、それらが受賞者の両腕に次々に高々と積み
上げられる様子に、毎年会場は笑いと拍手に包まれる。

笑いと言えば、弁士に負けずに笑いをとっているのが、初
回から司会を続ける大嶋三平氏の軽妙かつぬくもりのある大
分方言まるだしの司会だ。一番遠くから来た人を聞き出して
鰻頭などのご褒美をあげ、「なんか貰いださんかなーと(何
か貰えないかなと)」思っている客席に向かって「ひとーぎ」
と言いながら飴をばら撒く。「ひとーぎ」は「黍(しとぎ)」
という棟上の時に撒く餅のことで、観客は取れた取れないで
大騒ぎ。また、緊張の余り舞台上に早く出すぎた弁士には「も
ー出た。早えーなー」と、場をくつろいだ雰囲気を変えてし
まう名手である。本大会では開会時に市長や実行委員長も始
めの挨拶を方言で行うのだが、永松市長(豊後高田市出身)
の方言は毎回たどたどしく、会場から笑いと同情の拍手が贈
られることになる。最後に渡される表彰状も、もちろん方言
で書かれている。

「表彰状 あんたは 第〇〇回大分方言まるだし弁論大
会じ 方言ぬ ざまねー じょーじー つこーち みん
なん うげが 良かったき 記念品を贈り 表彰しちあ
げます(あなたは第〇〇回方言まるだし弁論大会で、方
言をとても上手に使用してみんなの受けが良かったので、記
念品を贈り表彰します。)」

会場スタッフは全てボランティアであり、その大部分は前述の若き後継者たちのグループ「テンブランド」の人々である。このグループは、最近評判の同市内「昭和の町（昭和三〇年代の商店街の復活）」でも案内ボランティアをしたりと、豊後高田市を活性化し続ける集団である。長年グループが続いて来た理由を土谷雄二代表（弁論大会実行委員長）に尋ねてみると、メンバーそれぞれが違う特技を持っていてその連携が上手くいっていること、全員がイベントを楽しんで運営していることという答えが返って来た。

三 弁士は高年者から中学生まで

弁士の出身地域は大分県内各地にわたるが、豊後高田市周辺の住人が多い。年齢は八〇歳以上から地元高田中学校の中学生まで実に幅広いのが特長である。本大会ではテーマは設けず、弁士が好きなことを話す。大きな笑いが起こるのは、日常生活で誰もがふと思うことなどを的確に方言で言い表した時だ。例えば孫にお小遣いを与えることについて、

「孫どもちゃ 正直なもんで。ま 魚と一緒ちゃ。い

い 餌が 無からにゃ 寄りつきやせんちこ。(孫(まん

ご)の運動会」第二十一回 中津市・女性・最優秀賞)

と魚に喩え、会場は大笑い(「大いに賛同」)した。ちなみに大分方言では引用の「とは」が「ちゃ」となる。また「…

ちこ」は焼酎の銘柄「いいちこ」と同じで、係り結びの「…とこそあれ」が強調の終助詞となったものである。

また、一般的には公の席で言い難い類の表現も、本大会では何処吹く風である。

「白杵しらきに 観光バスじ ぼっと 来ち 石仏見たわ いーけど バスん時間が どげーしよーかなつち 慌てて しっこ ひりよっちな。ぼっと 横飛ばすんじや。 ばーちゃんか しっこーな。(第二十二回 白杵市女性・三八歳「妖怪の街、白杵をアピール」)」

大分県白杵市は石仏で有名な南部の市。「ぼっと」は「ぼくと」とも言い、「急に、ふいに、いきなり」の意味。東北と九州に分布がある。「来ち」は「来て」、大分方言はテがテイやチ、デがディやジとなる口蓋化現象こうがいけが盛んである。「しっこ」は言うまでもないが「小便」のこと。この仕業に「せんちゃん(雪隠 婆さん)」が罰を当てたのが、口切れ・爪の逆剥けの本当の原因という話。弁士は白杵で観光ボランティアをしているそうだ。毎年、地元紹介の内容も多い。

四 「大分方言まるだし弁論大会」の底力

弁士には困らないと言うことだが、毎年高校生を出場させている宇佐市柳ヶ浦高校の渡邊三佐子先生をはじめ、地元高田中学校の先生方も生徒を出場させるために尽力されている

ことを忘れてはならない。とにかく元気いっぱい方言を使う中高生に、観客は目を細め、笑いやら拍手やらを惜しみなく捧げている。

「こんめー『カーちゃん 靴下！』つちゅーたら カ
じだらけん靴下を 出しち来ち 『できしこじゃ！』つ
ちゅーんで わしゃ もー たまがつちしもーた。(こ
の前、「母ちゃん、靴下！」と言ったら、徴だらけの靴下
を出して来て、「出来た分！一番マシな物だ！」と言うの
で、僕はもう驚いてしまった。第二十一回 高田中二年
生・男性・特別賞「わしん母ちゃんはチェジウに似ちよる
んで」)

中学生が出れば、次は話題にされた中学校の先生が登場する。司会者が舞台から観客に来年出なさいよと勧誘すると、出てんわーと答える観客がいて、次の年には弁士に名乗りをあげる。こんなつながりも、本大会を楽しんでいるからこそできるのだらう。高年者には、何度も挑戦する人も少なくない。前出の中津市・女性は三度目で最優秀賞を手にした。大会の規則では、最優秀賞を受けるまでは何度でも挑戦できることになっている。前年にうまく出来ず、その悔しさをバネに工夫・努力したからこそその受賞であらう。

日常の言語を舞台にあげることの是非を問う向きもあるが、方言でも「語り」の要素はあり、その面では芸能に通じ

るものがある。自然体で語るのが上手な人もいれば、練習を重ねて方言使いになりきってしゃべる人も見受けられる。どちらが良いかが審査員の中で議論になったこともあるが、それぞれに違う価値を持っていてどちらか一方が正解ではないように思う。重要なことは、自分の持ち前の方言にせよ、練習して身に付けた方言にせよ、「よく言えた」「うまく伝わった」という快感を弁士と観客が共有できた瞬間があるということなのだ。

本大会は一見素朴な作りのように見えて、弁士と観客が快感を共有する、その瞬間を損なわないための工夫が随所にある。それゆえに長く続いてきたのであらう。

(まつだ・みか 別府大学准教授)